

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

他者との関係を深めるにあたって、自分が他者に対して「受身の立場」をとれるということも大事です。

受身の立場とは何かというと、相手が自分に働きかけてくれることに対して、それなりにきちんとしてレスポンスできるということです。

それは、決して百パーセント相手に合わせることではないし、百パーセント丸ごと受容できないからといって親しさが無いということではありません。違うところは違ってもいいのです。でも、なるべくいろいろな人の言葉に耳を傾けるということが、関係作りのバランスを鍛え^①るいいトレーニングになると思います。

しかし、読者の皆さん、とりわけ若い皆さんがふだん何気なく使っている言葉（しかも使用頻度^②がかなり高いと思われる）に、きちんとした受身のレスポンスをとることをいつのまにか阻害する働きをしてしまう言葉があります。

そのことに気づいたのにはこんなきつかけがありました。私の娘が小学校の中学年ぐらいになったときに、ムカツクとかうざいといったたぐいの言葉をよく使うようになりました。そのあたりから、友だちへのまなざしがどうもよくない、友だちをマイナスの面から見るが多くなり、家族やまわりの人たちへのギスギスした態度が目につきました。そこで、こうした言葉を使わないようにとアドバイスしてみました。その言葉にはいくつかあって、私はそれらを取りわけ子どもたちにとっての「コミュニケーション阻害語」と名づけて、気にかけるようになりました。

その理由は次のとおりです。

子どもから大人になるプロセスにある十代は、その人が他者とコミュニケーションを取り交わす作法を学び取る大切な時期です。私たちは他者である相手と言葉を交わすことによって、情報内容の伝達だけではなく、思いや感情といった情緒的側面の交感をも重ねます。そうしたコミュニケーションの過程のなかで、自分から相手をまなざすと同時に、相手から自分に向けられるまなざしを受けとめながら、（いま・ここ）の自分のあり方を振り返り、とらえ直す作法を学び取ります。

しかしこれから検討していく言葉群、私が「コミュニケーション阻害語」と名づけた一連の言葉は、そうした自分と相手の双方向のまなざしが自分自身のなかで交差することを、著しく阻害する危険性があると思うのです。自分から相手を一方的にまなざすばかりで、相手からのまなざしを回避してしまう道具としての性格を、こうした言葉はいつのまにか帯びてしまっているというのが、私の考えです。

（一）私は、「こうした言葉を用いることを一律に禁止せよ」といつているわけではありません。大人になって、状況判断や相手との間合いの取り方などに長けてくれば、時と場合によっては、冗談半分で使うこともあるでしょう。でも他者とのコミュニケーションの作法をこれから学び取り、状況に応じた相手との距離の感覚やきちんとした向き合い方を身につけていかなければならない十代の若者たちにとって、これから取り上げる言葉群は、異質な他者ときちんと向き合うことから自分を遠ざける、いわば（逃げのアイテム）としての機能を持ち、そうした言葉を多用することによって、知らず知らずのうちに他者が帯びる異質性に最初から背を向けてしまうような身体性を作ってしまう危険性があることを、私は指摘したいと思うのです。

さて、ここで私の娘の話に戻りますが、こうした言葉を言わなくなつてから人に対する彼女の態度がハッキリ変わりました。自分が気に入らない状況やまるごと肯定してはくれない他者に対してある程度耐性が出来上がったようなのです。それは単に年齢が上になったからとか、少し大人になったからといった自然成長的な変化ではありません。彼女の内面で確実に何かが変わったのだと思います。

（菅野仁『友だち幻想』より）

問1 本文中()に入る言葉としてもっとも適当なものを、次のa～eから一つ選び、記号で答えなさい。

- a しかし b そして c なぜなら d たとえば e もちろん

問2 本文中~~~~線部の「れる」と同じ意味用法のものを、次のa～eから一つ選び、記号で答えなさい。

- a 担任の先生が転任される。
b 昔のことがしのばれる。
c このきのこは食べられる。
d 親に手伝いを言いつけられる。
e 世界遺産に登録される。

問3 本文中——線部①「相手から自分に向けられるまなざしを受けとめながら、へいま・ここ」の自分のあり方を振り返り、とらえ直す」と同様の内容を表している箇所を、本文中から三〇字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問4 本文中——線部②「こうした言葉」とは具体的にどのような言葉を指すか、本文中から二〇字以内で抜き出して答えなさい。

問5 本文中——線部③「彼女の内面で確実に何かが変わったのだと思います」について、「何か」とは何か、本文中から二字で抜き出して答えなさい。

問6 本文の内容に合致するものを、次のa～eから一つ選び、記号で答えなさい。

- a ムカツクとかうざいといったたぐいの言葉は、周りの人を傷つけてしまうことがあるので、好ましくない。
b ムカツクとかうざいといったたぐいの言葉は、小学生や中学生が好んで使っている。
c ムカツクとかうざいといったたぐいの言葉は、大人が冗談半分で使う分には大きな問題にはならない。
d ムカツクとかうざいといったたぐいの言葉を使うことで、自分が他者に対して受身の姿勢を取っている。
e ムカツクとかうざいといったたぐいの言葉は、大人になると自然に使わなくなる。

問7 本文中——線部ア～オの漢字の読み方を平仮名で答えなさい。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔、^{※注1}天竺の人、宝を買はんために、^{※注2}銭五十貫を子に持たせてやる。大きな川の端を
川岸を
宝を買おうとして

行くに、^a舟に乗りたる人あり。舟の方を見やれば、舟より亀、くびをさし出したり。

^b銭持ちたる人、立ちどまりて、その亀をば「なにの料ぞ」と問へば、「殺して物にせんず
「何のためのものか」 「殺して使おうと思っているのだ」

る」といふ。^①「その亀、買はん」といへば、^cこの舟の人いはく、「いみじき大切の事ありて、
「非常に大事なことがあって

「その亀を買おう」

「非常に大事なことがあって

まうけたる亀なれば、いみじき値なりとも、売るまじき」よしをいへば、なほあながちに、
「たいそうな値段であっても売ることはできない」
なお無理やりに

手をすりて、此の五十貫の銭にて亀を買ひ取りて、放ちつ。

心に思ふやう、^d親の、宝買ひに隣の国へやりつる銭を、亀にかへてやみぬれば、親、
亀に換えて使いきってしまったので

いかに腹立ち給はんずらむ。さりとてもまた、親のもとへ行かであるべきにあらねば、
どんなに腹を立てなざるだらうか。そうはいっても、親のもとに行かないわけにもいかないので、

親のもとに帰り行くに、道に人あひていふやう、「^②ここに亀売りつる人は、この下の
あなたに

渡りにて、舟うち返して死ぬ」となん語るを聞きて、親の家に帰り行きて、銭は亀に
渡し場で、舟がひっくり返って死んだ」

かへつるよし語らんと思ふ程に、親のいふやう、「なにとて、この銭をば返しおこせたる
「どうしてこの銭を返して寄越したのだ」

ぞ」と問へば、子のいふ、^③「さる事なし。その銭にては、しかしか亀にかへて、
「そうではありません。」
これこれで亀に換えて

ゆるしつれば、そのよしを申さんとて参りつるなり」といへば、親のいふやう、

「^e黒き衣着たる人、おなじやうなるが五人、おのおの十貫づつ持ちて来たりつる。これ、
似たような出で立ちの五人が

そなり」とて見せければ、この銭、^⑤いまだ濡れながらあり。
また濡れたままだった。

はや、買ひて放しつる亀の、その銭、川に落ち入るを見て、取りもちて親のもとに
実は、

子の帰らぬさきにやりけるなり。
子が帰ってくる前に届けたのだった。

『宇治拾遺物語』より

※注1 天竺……インド

※注2 貫……銭を数えるのに用いる単位。一貫は、一千文なので、かなりの高額。

実務能力はきわめて高く、辞書編集部になくてはならぬ女性だ。最初はパートとしての採用だったが、子育ても一段落したいまは、契約社員として働いてもらっている。

松本先生が馬締をどう感じるか、二人を引きあわせたときには、さすがに緊張した。松本先生は内心をうかがわせぬ微笑を浮かべ、馬締に軽く会釈したのみだった。

馬締は全員に対して、いちいちぎこちなく頭を下げた。乾杯が済み、料理が運ばれてきた。西岡はもともと、そのない男だ。松本先生のために、さつそく前菜を小皿にとりわけた。先生の苦手なピータンを、ちゃんとよける気づかいを見せている。さて、肝心のまじめ君はどうだろう。荒木は、松本先生の左に座った馬締へ視線を移した。馬締は佐々木のコップにビールをつぎたし、盛大に泡をあふれかえらせたところだった。がんばってはいるが、惜しい。

荒木はなんだか、幼稚園児を見守る心境になってきた。佐々木も同じ気持ちらしく、無表情のまま鷹揚に、馬締に返杯してやっている。

「まじめの趣味って、なんなの」

友好的な関係への道筋を探るべく、西岡が果敢に話題を振った。唇からはみでていたキクラゲを飲み込み、馬締は少し考えているようだった。

「強いて言えば、エスカレーターに乗るひとを見ることです」
円卓にしばし沈黙が落ちた。

「楽しいの、それ」

佐々木が平坦な口調で問う。

「はい」

馬締はやや身を乗りだした。「電車からホームに降りたら、俺はわざとゆっくり歩くんです。乗客は俺を追い越して、エスカレーターに殺到していく。けれど、乱闘や混乱は生じません。まるでだれかが操っているかのように、二列になって順番にエスカレーターに乗る。しかも、左がわは立ち止まって運ばれていく列、右がわは歩いて上っていく列と、ちゃんとわかれて。ラッシュも気にならないほど、うつくしい情景です」

「いまさらですが、ヘンですよ、こいつ」

ささやきかけてきた西岡越しに、荒木は松本先生と目を合わせた。松本先生がうなずいた。馬締がなにを言いたいのか、荒木と松本先生にはよくわかった。

ホームにあふれていた人々が、吸いこまれるかのごとく、エスカレーターのまえで整列し運ばれていく。そこかしこに散らばっていた無数の言葉が、分類され、関係づけられて、整然と辞書のページに並び収まるように。

そこに美と喜びを見いだす馬締は、やはり辞書づくりに向いている。

いま伝えなければならぬ、という思いに突き動かされ、荒木は口を開いた。

「なぜ、新しい辞書の名を『大渡海』にしようとしているか、わかるか」

馬締は、つまみのピーナッツをリスみたいに一粒ずつかじっているところだった。佐々木が指先で軽く円卓を叩き、注意をうながす。それでようやく、話しかけられているのは自分だと気づいたらしい。馬締はあせった様子で首を振った。

「辞書は、言葉の海を渡る舟だ」

魂の根幹を吐露する思いで、荒木は告げた。「ひとは辞書という舟に乗り、暗い海面に浮かびあがる小さな光を集める。もつともふさわしい言葉で、正確に、思いをだれかに届けるために。もし辞書がなかったら、俺たちは茫漠とした大海原をまえにたたずむほかないだろう」

「海を渡るにふさわしい舟を編む」

松本先生が静かに言った。「その思いをこめて、荒木君とわたしとで名づけました」

きみに託す。声にはしなかった言葉を聞き取ったのか、馬締は円卓から両手を下ろし、姿勢を正した。

「見出し語の数は、何万語を予定していますか。『大渡海』の特色は。詳しい話を聞かせてください」

馬締の目が輝きを帯びている。松本先生は箸を鉛筆に持ちかえ、佐々木は鞆から大学ノートを取りだして広げた。荒木は「よし」と意気込み、新しい辞書の構想を語りだそうとした。

(三浦しをん『舟を編む』より)

問1 本文中~~~~線部a〜cの表現について、本文中での意味としてもっとも適当なものをア〜エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a 「適材適所の原則を踏みはずしてしまった」

ア 出版会社にとって辞書の編纂は大切な仕事であるのに、採算が合わないからという理由で、辞書の編纂をしなかった。

イ 社員は自分が希望した仕事内容を選択できるべきであるのに、会社の都合で希望しない仕事内容になってしまった。

ウ 会社は社員の性格や特性によって適切な仕事内容を与えるべきであるのに、そのような配慮をしなかった。

エ 出版会社にとって大切なことは、良い本を作ることであるのに、本を売る営業の仕事ばかりを重視してしまった。

b 「立ち歩くミイラを目撃したような表情」

ア とても恐ろしいものを見たような表情 イ とても興味深いものを見たような表情

ウ とても不思議なものを見たような表情 エ とても美しいものを見たような表情

c 「幼稚園児を見守る心境」

ア これからどのように成長するか楽しみだ イ 何か失敗してしまわないか心配だ
ウ もっとがんばれるはずなのにもどかしい エ 無邪気に振る舞う様子が微笑ましい

問2 本文中——線部①「そうか、と荒木は察した」とあるが、どのようなことを察したのか、本文中から三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問3 本文中——線部②「松本先生がうなずいた」とあるが、この時の松本先生の気持ち
を端的に表している箇所を、本文中から十二字以内で抜き出して答えなさい。

問4 本文中——線部③「馬締の目が輝きを帯びている」とあるが、馬締がこのように
思いになった理由を本文中の「きみに託す」ということばを入れて、わかりやすく説明し
なさい。

問5 次は、本文中——線部「辞書は、言葉の海を渡る舟だ」について、春子さんと秋雄
くんが、佐藤先生と話し合った対話文である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

春子さん 先生、この「言葉の海」とはどういう意味ですか。

佐藤先生 では、一緒に考えてみようか。最初に国語辞典の歴史を見てみよう。

日本最古の国語辞典は、平安時代に編纂された『色葉字類抄』であると言われているんだ。その後、いろいろな辞書が作られたんだけど、明治になって、外国の辞書を参考に、大槻文彦というひとが『言海』という辞書を編纂したんだ。

秋雄くん その『言海』と「言葉の海」とは関係ありそうですね。

佐藤先生 そうだね。では春子さん、「海」にはどんなイメージがあるかな。

春子さん うーん、広いとか深いとか、そんなイメージです。

佐藤先生 すると、「言葉の海」とはどういうことだと思いますか。

春子さん 「言葉は、数が多くて意味も深い」ということを海にたとえた表現ということですか。

佐藤先生 そうだね。では、その海を渡るのにどうして辞書という舟が必要なんだろうか。

秋雄くん 荒木は「ひととは辞書という舟に乗り、暗い海面に浮かびあがる小さな光を集める」

と言っています。これと関係ありそうなんだけど。

佐藤先生 では、一緒に考えてみよう。ところで秋雄くん、「右」ということばを辞書で引いてみたことはあるかな。

秋雄くん 「右」は引かなくても分かるから引いたことはありません。

佐藤先生 では聞くよ。「右」とはどんな意味ですか。

秋雄くん 鉛筆や箸を持つ手のほうです。

春子さん でも、左利きの人もいるよ。

秋雄くん では、心臓がないほう。

佐藤先生 中には、心臓が右側にある人もいるそうだよ。では、辞書を引いてみよう。

秋雄くん 秋雄くん、一覧表にまとめてくれるかな。

秋雄くん はい。このようにまとめてみました。

岩波国語辞典 (第八版)	東を向いた時、南の方、また、この辞典を開いて読む時、偶数ページのある側をいう。
三省堂国語辞典 (第七版)	「一」の字では、書き終わりのほう。「リ」の字では、(C)。
新明解国語辞典 (第八版)	アナログ時計の文字盤に向かった時に、一時から五時までの表示のある側。

佐藤先生 ありがとう。秋雄くん、これをまとめてみてどんな感想を持ったかな。

秋雄くん 辞書は、言葉を正確に理解するためにとっても大切なものだと思います。た。それと、そのために辞書を編纂するひとはとても工夫しているんだと思いました。

佐藤先生 うん。辞書があることで「**D**」と並べられた言葉を、私たちが使うことができるんだね。

春子さん 「右」というよく使われる言葉も、改めてその意味を聞かれると答えられないように、「言葉の海」は、「暗くて」「茫漠」としているということでしょうか。

佐藤先生 その通りです。だから、私たちは、その言葉の意味をしっかりと理解して正しく使わないといけないんだ。

秋雄くん すると、「小さな光」というのは、それぞれの言葉の持つ「意味」ということになりますね。

春子さん だから、「**E**」には、「ふさわしい言葉で、正確に」伝える必要があるということですね。

(1) 対話文 —— 線部Aに関連して、平安時代に書かれた作品を次のア～オからすべて選び、記号で答えなさい。

ア 源氏物語 イ 古事記 ウ 枕草子 エ 奥の細道 オ 土佐日記

(2) 対話文 —— 線部Bを表すことばを本文中から二字で抜き出して答えなさい。

(3) 対話文の空欄 (C) にはどのような言葉が入るとよいか、考えて答えなさい。

(4) 対話文の空欄 「D」に入る言葉を、本文中から十五字で抜き出して答えなさい。

(5) 対話文の空欄 「E」に入る言葉を、本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

【五】次の(1)～(5)のカタカナの部分に漢字に直して、楷書で書きなさい。

(1) アザやかな緑に覆われた山。

(2) 夏目漱石の小説をカンショウする。

(3) 彼とは、一〇年ぶりのサイカイであった。

(4) 体育の授業の後で、とてものがカワいていた。

(5) せみがカラを破って出てきた。